

地域に支えられる児童福祉施設と学習支援の課題

－札幌市児童会館における実践事例から－

○ 北海道教育大学札幌校 古村 えり子 (4266)

キーワード：子どもの貧困、児童福祉施設、学習支援

1. 研究目的

地域における児童福祉施設として児童館(会館)は学校と役割がことなり、学習支援などは基本的には実施しない。学力の問題は学校で解決すべきであるとの見方が行政関係者の認識であった。しかし、札幌市ではボランティアが学習支援をすることを推奨しており、図書室で子どもが勉強しているのを支援、あるいは長期休みの学習時間でのサポートを推奨している。

本研究では札幌市の独自の取り組みを踏まえて以下を目的とする

1. このような児童会館が子どもにとってどのような存在なのか
2. 地域の児童福祉施設として住民がどのように関わっているか
3. 学習支援の場としてどのような役割を果たしているのか
4. とくに経済的困難な状態にある家庭の児童にたいする継続的支援の可能性

2. 研究の視点および方法

研究の視点

地域における子どもの生活圏は大人が支えてこそ、その発達を保証できる。かつてはインフォーマルな関係性においてなされていたが今日では不審者問題があり事実上そのような関係は不可能である。しかし、児童館のような公共施設が媒介となることによって地域の子どもの大人が見守り支えることが可能となる。また経済的困難などの要因により学校教育のなかで充分学力をつけられない子どもは独自に支援することにより成果が挙がることはこれまでの先行実践で明らかになっている。

本研究では、2009年に札幌市の全児童会館、ミニ児童会館を対象として郵送調査を実施した。

また、2012年から厚生労働省の補助事業として経済的困難な状態にある中学生に対する学習支援事業がはじまり、2013年度はさらに範囲を拡大して実施予定である。参与観察の方法を学生指導し、その効果と継続可能性を検討する。

3. 倫理的配慮

調査は古村研究室独自のものであり、当時の大学院生とともに実施した。また自由記述の内容から児童会館や個人を特定できるものはないことを確認した。日常的に学生をボランティアとして派遣しているが、学習支援の実践では個人名でなく、子どもも学生もミックネームで呼び合い、事後の交流会でも個人名や写真は明かさない配慮をしている。

4. 研究結果

札幌市の児童会館・ミニ児童会館は子どもが徒歩で行ける生活圏の範囲にあり、留守家庭だけでなく、保護者が家にいる家庭であっても地域における子どもの居場所として定着している。

では、子どもたちにとって児童会館の児童厚生員はどのような存在なのであろうか。子供たちは、学校では見せない家庭の問題をしばしば厚生員に見せる。「学校の先生にも家庭の父母にも話せないことを厚生員に話す」という児童会館は25%に上る。「学校で解決できない「いじめ」を児童会館の子ども集団で解決した事例もある。そのほか、「継続的な援助が必要な児童の存在を認識」「学校とは異なる自由なプログラムの編成」「子供の縦割り集団と自治の形成」など、いろいろな経験により「学力」では測れない力を身につける可能性を秘めている。

地域住民との関係では、子どもの保護者はもちろん町内会や老人クラブの協力、高校生や大学生のボランティアに支えられている。

これまでも学習支援は児童会館でインフォーマルに行われていたが対象は主に小学生であり、特定の階層ではない。しかし、昨年度から経済的に困難な家庭の中学生に対する学習支援事業が開始された。学習習慣がついていない場合や集中力の問題がある場合も少なくないがそうした問題の解決も含めて地域の支援体制により学校でできないことを可能にする実践として期待される。

5. 考察

札幌市の児童会館は地域の子どもを守り、その発達を保証する児童福祉のかなめとしての役割を獲得しつつある。学習支援は公立学校の役割であるとの立場もあるが、現実問題として学習習慣のついていない子どものばあい、学校と家庭だけでは指導しきれない。

地域の大切な子どもとしてこのような場で支援が続くことが求められるがそれはこれからの実践にかかっているといえる。